
魔法少女のぞみ マギカ

白萩之右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女のぞみ マギカ

【NNコード】

N1765Z

【作者名】

白萩之右

【あらすじ】

魔女がいなくなり、代わりに魔獣が跋扈する世界。魔法少女の望月のぞみは、ある日魔獣ではない何かに襲われ、危ないとこをほむらに助けられる。

この話は、登場人物のほとんどがオリジナルキャラクターで占められます。主人公もオリジナルキャラクターです。

すべての魔女を生まれる前に消し去りたい。

彼女はそう願つて概念となつた。

彼女の人生に始まりも終わりもない。

彼女は今でも 未来永劫にわたつて 魔女を救済し続けてい
る。

だからあれは魔女などではない。

この世界に魔女など存在しない。

私はあれを魔女と認めない。

望月のぞみは困惑し、怯えていた。目の前にいるあれは、いつた
い何なのだ。いつものように魔獣退治をしていたら、突如として薄
氣味悪い景色と共に現れたのだ。魔獣ではなかつた。彼女が魔法少
女になつてから、あんな魔獣は一度も見たことがなかつた。

そもそも魔獣は、どれも画一的な外見をしている。のぞみが見て
いるそれは、画一的とは程遠い、対極に位置するような、やたらと
個性的な見てくれをしていた。

そのやたらと個性的な、歪な怪物からは、強烈な悪意や憎しみが
感じ取れた。というより、それしか感じ取れない。

あの怪物はまるで、純粹な負の感情でできているかのようだつた。
のぞみは背筋が凍つた。体中が震え、吐き気がこみ上げてくる。

不快 というよりかは恐怖だつた。これほどまでに負の感情に当
てられるのは、初めての経験であり、ただひたすら恐怖しか生ま
なかつた。

怪物が迫ってきた。逃げなければ、とのぞみは思った。頭の中に
反撃という選択肢は、消えていた。しかし、彼女の足は動かなかつ

た。動けと命じても、ただ震えているだけだった。

のぞみの事情などお構いなしに、怪物は徐々に徐々にと距離を詰めてくる。まるで処刑台の階段を上らされている気分だった。

死、という単語が頭の中で浮かんだ。そしてそれはだんだんと大きくなつてくる。

だが相変わらず いや、むしろ死との距離が縮むほど、彼女の体は恐怖で固まつていった。そして怪物が、死が、彼女の目前まで迫つた時

一筋の光が走つた。それは光の矢だった。矢は怪物を貫き、爆散させた。

怪物がやられたせいか、薄気味悪い空間が消滅して、現実のビルと星空の景色に戻つた。死という単語も、処刑台の階段も消えてなくなつていた。

「危ないところだつたわね」

後ろから少女の声がした。その声によつてのぞみの意識は、恐怖という呪縛から解放された。そして、声がした方を振り向くと案の定と言うべきか 弓を持つた少女がいた。冷静沈着そうな佇まいだが、赤いリボンで結つたツインテールが可愛らしくもあつた。

「…………魔法…………少女？」

のぞみは呆けたようにつぶやいたが、すぐにハッとして、

「あつ、危ないところを助けていただき、ありがとうございます。

私、望月のぞみつて います」と深々と頭を下げる礼を述べた。

「暁美ほむら、あなたと同じ魔法少女よ」

のぞみに自己紹介をしたら、ツインテールの少女も自身について名乗つた。

「ところで、あれと出合つたのは、今回が初めてかしら?」

ほむらはのぞみの目を、ジッと見ながら訊いた。彼女の眼差しは真剣そのものだった。

「え？ あ、はい。あんな魔獸（？）初めて見ました」

その眼差しに圧されてか、のぞみは若干ビクつきながら答えた。

「あのっ、……あれがいつたい何か、ご存知なんですか？」

先ほどの怪物のことだ。何と呼べばいいのか分からなかつたので、

魔獸に疑問符をつけてみたが、魔獸でないことぐらいは、誰の目から見ても明らかである。その怪物について、のぞみの目の前にいる少女は、何か知っている風なのだ。気にならないはずがない。

ほむらは星空を見上げ、どこか思い出に浸るように口を開いた。

「そうね、あれは

そうしてのぞみの問いに、こう答えた。

「魔物、と私は呼んでいるわ」

1話（後書き）

というわけで私的妄想魔獣編です。登場人物はほとんどがオリキヤラになる予定です。ちなみに、ほむほむは漫画版のツインテほむです。ツインテほむ可愛いですね。

「魔物……ですか？」

「そう、魔物よ」

のぞみとほむらは、ショッピングモールの中にある、ファーストフード店にいた。あの時は、もう夜も遅かったので、翌日に学校が終わってから、改めて話をしようということになつたのだ。のぞみはポテトとバニラシェイク、ほむらはコーヒーを注文していた。

「ほむらさんは、その魔物のことを調べているんですか？」

のぞみの質問に、「そうよ」とほむらは答え、詳細を語りだした。話はこうだ。ほむらはおよそ半年前に魔物のことを知った。発生の原因について、魔物を倒しながら、しらみつぶしに調べていた。そうしてこの街でも、何か手掛かりがあるか調査していたら、昨晩の出来事に至つた。

「魔物の正体も発生原因も、私の知る限りではまだわかつていないわ」

結局、自身の状況を説明しただけになつてしまつたが、ほむらの話をのぞみは、真剣な面持ちで聞いていた。優しい、良い子なのだろう、とほむらは思つた。のぞみにどこなく似た、優しい少女のことを思い出す。もつとも、彼女のことを覚えているのは、ほむらだけであつたが。

だからかもしれない。

ほむらはのぞみに対して、罪悪感を抱いていた。

魔物について、何もわかつていないと言つたが、実はほむらには、魔物の正体に心当たりがあつた。

なぜなら魔物は、あれによく似ていたからだ。

ほむらはそのことを、誰にも言つつもりはなかつた。

言つてしまえば、あの時の バママにに関しての 苦い記憶が再現されてしまうかもしれないし、何より彼女の願いを、否定しま

うよつな気がしたからだ。

けれども、目の前の少女にそれを隠すのは、彼女に隠し事をしていた時のような気分だった。

ほむらは、カップを取り、口へ運んだ。罪悪感をコーヒーで、流し込んでしまったからだ。

「あの……ほむらさん……」

のぞみに話しかられ、ほむらは一瞬ドキリとした。隠し事が感づかれてしまったのだろうか。

「何かしら?」

すぐに心を平静にして、のぞみの方へと視線を向けた。のぞみは何かを遠慮しているような、迷っているような表情を浮かべていた。だがそれは、わずかな時間だった。のぞみの表情は、意を決したものへと変わり、こう言つた。

「私も魔物の調査、手伝わせてください」

ああ、その話か、とほむらは思つた。のぞみと同じよう、協力を申し出た魔法少女に、何度か出会つてきた。けれどもほむらは、それをすべて断つていた。先ほども述べたように、魔物の正体について、多少気がかりだつたからだ。

だから今回も、のぞみの申し出を断るつもりだつた。だが

「わたし、みんなを護りたいんです。みんなの希望になりたいんです!」

だが、のぞみが、どことなく彼女に似ていたせいかもしれない。のぞみの言葉に、ほむらの心が、僅かに揺らぐ。

のぞみの目は、希望と自信に満ちていた。はじめて出会つた時の彼女と、同じ目だった。けれども、その時の彼女は、みんなを護るために戦い、そのまま

「……好きにしていいわよ」

言つてしまつた、とほむらは後悔の念に駆られる。

いや、見張りだ。これはのぞみが昨晩みたいに、危険な目にあわなによつて、見張るためなのだ。ほむらは、そう自分自身に言い訳

をする。

「おつがとうござります。せむりさんのお役に立てるよう、一生

懸命頑張ります。」

のれみはほむりの手をとり、とても喜んだ顔で礼を言つた。そのまま、眩しいほどに輝いていた。

「おつしてほむらはのぞみと一緒に、魔物の調査することになつた。

2話（後書き）

そんなわけで第2話です。

ところで、The Beginning Storyを買いました。10話でほむほむの持つている銃が、アニメと漫画で違うのですが、The Beginning Story読んだら疑問が解消されました。脚本だとほむほむ、デザートイーグルじゃなくて、リボルバー使ってたんですね。

そんなわけでThe Beginning Storyオススメです。まだ買ってない人はぜひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1765z/>

魔法少女のぞみ マギカ

2011年12月21日13時51分発行